

アーカイブ 通信 No.28

◆編集・発行：
ネットワーク・市民アーカイブ
<http://www.c-archive.jp/>

事務局

〒189-0012 東京都東村山市萩山町 2-6-10-1F

tel・fax：042-396-2430

E-mail：info@archive-tama.sakura.ne.jp

会員募集中

◆正会員 1 口 6,000 円、賛助会員 1 口 3,000 円 / 年
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226
口座名：市民アーカイブ ※団体会員 2 口～

◆声を出不せない被害者
2011年の東日本大震災の直後、古滝屋は救援物資を受け渡す拠点として、いわき市民にロビーラウンジを開放した。全国からボランティアも集まったので、疲れを癒してもらうために、温泉を提供し、宿泊料も2000円とした。人びとが集まりやすくなるための工夫だ。

そのうち訪れる人を被災地に案内するスタディツアーを実施するようになった。原子力災害の被災者はさまざまな思いを語ってくれたが、被害者と原発関係者が共存する地域の公共の場では本音を語りにくいことがわかってきた。また、いわき市には帰還困難地域から2万人以上の住民が避難していたが、「復興」という言葉が広がるにつれて、その人たちが声を出不せなくなってきた。避難者として声を出すと、「復興」の妨げになるのではないかと思われているように感じた。



被災者より加害者のほうが威勢のよい世の中に、私は違和感を覚え、故郷を追われ、家族を失い、差別を受ける人びとの声を記録し、資料館をつくりたいと考えるようになった。

◆民間資料館の意義

14年には水俣を訪ね、公立の水俣病資料館と民間の水俣病歴史考証館とを見学した。双方の展示を見て、初めて水俣病の全体像がつかめた気がして、被害者に寄り添った民間展示の役割を認識した。また、原発災害は公害と構造が似ていることもわかった。背景には、衣食住を他者に依存したライフスタイルがある。他人を犠牲にしてまで経済至上主義を進める世界に、原発事故に遭った福島県から発信するため、衣食住・エネルギーを自分たちでつくり出そうと「おてんとSUNプロジェクト」の取り組みも始めた。

その頃、福島県でも震災の公立資料館設立の計画が持ち

上がっていた。私は地元の議員に原発事故の資料展示や放射線量が高くて住めないエリアを、そのまま保存することを提案したが、「それはできない」と即答されてしまった。官民の資料館それぞれの役割を水俣で学んでいたの、いわきで民間の資料館を設立しようと決心した。

◆こぼれ落ちていく事実

私は、東日本大震災と原子力災害とは全く別のものと思っている。自然災害と人災であり、特徴が違う。一方は、畏怖の念を持ち災害を受け入れていく必要がある、もう一方は人間の欲望が根源になっているからだ。

福島県双葉郡双葉町に「東日本大震災・原子力災害伝承館」(以下「伝承館」)がある。国の政策である「イノベーション・コースト構想」を公報し、明るい未来のイメージを示すために53億円をかけてつくられた施設である。津波により、日本の経済を支え、私たちもお世話になった原発で事故が発生したが、それは過去のことで、これから明るい未来のことを考えていきましようと思ってくつている展示だ。公的施設だから、加害は展示しにくいこともあるのだろう。「伝承館」に

展示されない、こぼれ落ちてい
る事実や被害者としての立場
からの展示を「原子力災害考証
館 funusato 考証館」(以下「考証
館」)は目指している。

福島にも水俣病考証館のよ
うなものをつくるぞと意気込
んだが、実際に「考証館」がで
きるまでには7年がかかった。
温泉地・観光地である湯本温
泉のど真ん中に「原子力」とい
う名がつく施設をつくること
には、「今も原子力災害が継続
していて、放射能汚染被害があ
る」という風評につながる」とい
う反対意見があった。その時
は「旅館だけやっていれればいい
のか」と迷ったが、声に出せない
人たちの思いを知ると「やつ
ぱりやらなくちゃ」という思い
が湧く。その繰り返しで、実際
にはなかなか考証館の準備に
踏み切れなかった。それでも、
原発事故からの10年を区切り
に開館できたのは、仲間たちが
後押ししてくれたからだ。

◆一人ひとりの思いを伝える

「考証館」の入り口に、浪江
の商店街のパノラマ写真があ
る。14年と20年の写真を上下
に並べた。写真の中にお店、
自転車・おもちゃ・プラモデ
ルなどが売られていた店があ
る。そのお店が実家の三原由
起子さんの短歌も添えた。

「わが店に 売られし おも
ちゃのショベルカー 大きく
なりて わが店こわす」

展示の真ん中には、大熊町の
木村紀夫さんとご家族につい
てのコーナーがある。大熊町
は第一原発の立地する町で、
津波に飲み込まれた海岸沿い
は、震災後すぐに捜索が入っ
た。木村さんの家族も流され
てしまった。翌日に原発が水
素爆発し、また家族が生きてい
るかもしれないのに、捜索は打
ち切られた。海岸周辺が入れ
るようになってから、木村さん
は1人で捜索を始めた。整備
工事が計画されると、木村さん
にも土地の整備を承諾するよ
う求められたが、まだ遺骨が見
つかっていないからと断って
いた。

その後、国に頼み、重機を



入れて、ようやく遺品が見つ
かった。6人家族のうち3人
を亡くした。ずっと見つから
なかった次女の遺品も、マフ
ラーと一緒にあごの骨が見つ
かった。この時までに5年9
か月の歳月が経っていた。木
村さんは次女のマフラーを、
ガラスケースもないこの「考
証館」に展示してくださり、
その後も時折訪ねてこられて
は、流木や服などの遺品を追
加していかれた。展示スペー
スもそれに伴って倍の大きさ
になっていた。次女と対話
しているかのように、展示を
積み上げ、並べていかれる。
木村さんは今、多くの人びと
に自分の思いを伝えようと、
伝承活動を続けておられる。

◆居心地の良い空間で

資料を見て考える時間を

ほかに、原発事故をめぐる
陳述書や裁判記録なども展示
している。多くの家族の陳述
は、原子力災害の悩みや悲しい
事実の記録である。また、こ
でしかない手に入らないよう
な地域誌も置くようにしてい
る。水俣の資料もあるが、こ
れは水俣病センター相思社の姿
勢に共感し、展示しているも
のだ。別室の企画展スペースで
は現在、放射性物質を含む土壌
を保管する「中間貯蔵施設」を

取り上げ、用地地権者の声を紹
介している。

資料を見るだけでなく、考
えてもらうことを大切にしてい
る。見学者の中には午前中
から夕方まで、ずっと資料を
見ていかれる方もいらっしや
る。2人の子どもが、昼の上
に寝そべって本を読んでいる
こともあった。お菓子を食べ
たり、赤ちゃんに飲み物を与
えている家族もいた。規制す
ることはせず、考証館が居心
地の良い空間であってほしい
と思っている。



里見喜生さん

原発事故から12年を経て、
私はさまざまな考え方の人び
とと出会ってきた。そして、加
害者と被害者が対立するので
はなく、一緒に考える対話の
場が必要だと思っている。「考
証館」には、さまざまな立場の
方が訪れてほしいので、対立
をおおるような展示にならな
いよう心掛けている。原発を
推進している国会議員が訪れ
た際、「1人の人間として、地
球に住まわせてもらっている
生き物として、ここで起きた
ことを見てください」と話し

たこともあった。

◆日常の中にある資料館

古滝屋旅館の玄関の横には
大きなブックラウンジがあ
る。ここには原発事故や震災
についての本はもろろんのこ
と、いわきの歴史や哲学、サブ
カルチャーの本など、幅広い
分野の書籍を置いている。原
子力災害は、縁遠いできごと
ではなく、むしろ日常生活の
延長で起きたのだから、観光
や温泉を楽しむに訪れた方
に、日常の中で、この町の歴史
や災害に触れてもらえるよう
な場をつくりたいからだ。

「考証館」には、当初反対の
声もあったが、開館後はマ
スメディアが取り上げてく
れて、注目されるようになって
きた。今では、行政や観光業者
がつくる観光コースに、地元
の神社や和菓子屋さんなどと
ともに「考証館」が組み込ま
れるようになった。所属する上
部組織が反対していても、
個人的に応援してくれる人が
たくさんいることに気づき、
感動した。さりげない応援や
「考証館」の意義を認めてく
ださる地元の方も増えてきた。
「考証館」の展示室の広さは
20畳と小規模だ。「このような
展示なら、自分にもできる」
と、話して帰られた方もいらっ

しゃった。私は、小さな民間の資料館、個人の展示室が、福島県内に10軒、20軒とできてほしいと願っている。「こういうことを知りたい」と尋ねられた時に、「それならば、あそこの○○さんの家の資料室に行っておいで」と、言えるようになった

ら、本当に嬉しい。
福島県の浜通りは、石炭↓原発↓水素とつながるエネルギー転換を歴史的にとらえることができる地域だ。「考証館」を訪れ、原発災害に1人ひとりが向き合い、エネルギーのこと、生かされていること、人

類の役割など、対話が発展していくと嬉しいし、それが私の今後の人生の楽しみだ。
【連絡先】福島県いわき市常磐湯本町三函208
いわき湯本温泉・古滝屋内
Email: furusatonm@gmail.com
<https://furusatonm.mystrikingly.com/>

学に集中できない」、「原発事故にある人災の側面の説明が不十分」、あるいは「政策の説明に重点をおいた復興のコーナーは、博物館にはそぐわないのでは」などと、率直な感想を述べた。淡々と聞かれていた瀬戸さんだが、「伝承館」の運営方針と学芸員の考え方とのズレにふれ、調整や修正を重ねていると話された。さらに、瀬戸さんのご好意により収蔵庫を見せていただく。広いスペースに整然と収納されていたのは、津波の巨大な力によりねじ曲げられ、破壊されたモノ、さらには原発事故による緊急避難を物語るモノだった。今後も収集・保存に全力を尽すと瀬戸さんは解説された。

の他にも、地元情報や地域の動向を伝えるミニコミなどを配したスペースや、書棚の並んだブックラウンジなどがあり、私たちは関心のおもむくままに、それぞれの時間を過ごした（「考証館」の詳細は前項参照）。

◆とみおかアーカイブ・ミュージアム

午後は、ふたたび常磐線に乗車、夜ノ森駅まで北上する。桜並木で知られる駅周辺を歩き、避難指示が解除されたばかりの富岡町内を大型タクシーで巡る。途中、汚染土壌を袋詰めた黒いフレコンバッグの野積みを見たが、中間貯蔵施設以外の場所になぜ置かれているのか、不思議だった。富岡駅に近い海岸から見た福島第二原発も印象的だった。



福島原発事故の記憶と検証

—双葉町・富岡町・いわき市を訪ねる—

避難の検証、その記憶や記録をめぐる議論が、活発に交わされるようになった。
同じ頃、浜通りでは、これまで立入りを厳しく制限していた避難指示を解除する動きが加速。また、事故を起こした福島第一原発敷地内にたまり続けている放射能汚染水を太平洋に放出する手続きが、政府主導で進みはじめていた。

◆東日本大震災・原子力災害伝承館

から30キロ圏内を走行する車窓には、空き家が点在する風景が今も広がる。
いわきを拠点に被災者支援をつづけている現地参加者2人を加えた総勢11人は、双葉駅で合流後、「東日本大震災・原子力災害伝承館」（以下、「伝承館」）を訪ねた。他団体の見学と重なり、急かされるように館内を見て回った後、伝承館の瀬戸真之学芸員と対話する機会をもった。参加者は「画像や音声資料が多いが、かえって見



◆原子力災害考証館

furusato

翌11月27日の午前中は、宿泊したいわき湯本温泉、古滝屋にある「原子力災害考証館（furusato）」（以下、「考証館」）の見学にあてた。古滝屋と「考証館」の館主をつとめる里見喜生さんとは挨拶を交わせたが、あいにく里見さんはこの日、被災地見学のガイドの依頼があり、足早に出かけていかれた。



◆10年目の浜通り

東日本大震災から10年目となる頃から、被災地では、アーカイブ施設の開設が相次いだ。津波被害と原発事故のあった福島県浜通りでも、いくつかのアーカイブが誕生し、それを機に人びとが体験した被災や

2022年11月26日、我々はJR常磐線双葉駅改札口に集合した。そうすれば、長らく不通だったいわき駅以北の常磐線の現況を、参加者は知ることができると、車窓からの風景を眺めることも（現場）踏査になると考えたからだ。福島第一原発

古滝屋館内には「考証館」

その後、「とみおかアーカイブ・ミュージアム」(以下「とみおか」)を訪問、門馬健学芸員と吉野高光学芸員の案内で、展示を見学した。昨日訪ねた「伝承館」は延べ約5200㎡あり、とても広く感じたが、「とみおか」も約3200㎡と大きな施設だ。

「伝承館」の展示は、11年3月11日を起点とした構成だったが、「とみおか」の展示では、考古資料からはじまり、古代から近現代までの時系列に沿って、富岡のなりたちや特徴を伝えることが目指されている。これに加えて甚大な津波被害や原発事故により慌ただしい

避難を強いられた町民の体験を伝えるさまざまなモノ資料や文書資料に、展示室の残りの半分を割いている。モノや資料群に語らしめる博物館らしい手法と資料の選択眼を感じさせる展示だった。富岡のなりたちや特徴を伝える展示と震災後をテーマに

した展示とをつなぐ位置に、原発誘致を解説するパネルがある。農閑期は出稼ぎに頼らざるを得なかった富岡だが、原発ができたことで出稼ぎが不要になったという旨が記されていた。原発がもたらした最大の効用として、出稼ぎからの解放

は、しばしば耳にする。一方で、原発誘致についての記憶は、もはや語られることはない。こうした現状に気づくと、ぜひ「とみおか」には、出稼ぎについて、その仕組みや人びとの実体験を、モノや文書で雄弁に語っていただきたい、と感じた。(杉山弘二運営委員)

第9期 緑蔭トーク報告

第1回 4月22日

市民活動 私の履歴書

ーベ平連、声なき声の会、憲法の会、くらしうた研究会…

細田伸昭

(市民のひろば・憲法の会／シビル)



◆戦争の補給基地の下で育って

私は、立川で生まれ育ちました。自宅はかつての米軍立川基地(1968年飛行停止、73年返還)から400メートルほどの所にあり、近所の諏訪神社には基地の誘導灯が立っていました。ベトナム戦争の最中、補給基地である立川基地は、ベトナムに行き来する迷彩機が、ひっきりなしに飛び交っていました。通った小・中学校は、諏訪神社の両隣にあったので、今の普天間基地のような所でした。私の父は兵士、母は従軍看護婦

◆安保闘争・公害問題

高校の時には、70年安保闘争や「高校紛争」を経験しました。またこの時期、公害問題が全国的に起こり、私は、この解決には科学的な知識が必要だと、化学を学ぶ進路を選びます。大学では分析化学を専攻する傍ら、ベ平連や大学祭の活動に力を入れました。それが、「模索舎」(現在、模索舎アーカイブズ委員会メンバー)や「声なき声の会」

(現在、世話人)、学生時代の友人たちとの活動(福島の新シタケ農家を追った映画の自主上映支援、首里城地下にある旧司令部

壕の保存・公開の応援)に続いています。

理科(化学)の教員になり、地元の公民館で「戦争を語り継ぐ」という活動に参加したり、『白バラは死なず』(西ドイツ映画。当時)の自主上映会をしたこと等がきっかけで87年「市民のひろば・憲法の会」を結成し、今に続いています。地域での市民活動が、現在、理事・事務局を担っている「シビル」での活動にも繋がっています。

◆音楽を楽しむ、平和教育も

ただこれは、市民としてのいわば「社会的な活動」の側面です。私は「音楽的な活動」という側面や、たつきとしての「仕事」も大切にしてきました。

「音楽的な活動」は、10代後半から大ファンだったフォークシンガーの笠木透さんとの付き合いが、大きな比重を占めています。88年に多摩地区で初めて笠木透コンサートを開催、その時出会った人たちでフォークソング愛好会「くらしうた研究会」を作りました。細く長くをモットーに、国分寺の「学びの広場」で月1回の「うたごえ喫茶(杜甫)」(継続中)や、笠木さん繋がりで親しい作曲家の岡田京子さんと小金井の現代座で、大人のための学びの場「寺子屋」を開講したりしてきました。今でも、不定期に「笠木透を歌う会」を国立の「かきこみ亭」で開催しています。

「仕事」も中学校や高校の教

◆風通しのいい市民活動を

私の中では、社会的な活動、音楽的な活動、仕事という3つの領域でバランスを取りながら、筋を通して継続してきたと思っています。

- ①自分で出来ることをやる
 - ②やれることを継続する
 - ③やるからには楽しんでやる
 - ④偉そうなことは言わない
 - ⑤情報はできるだけ共有する
 - ⑥記録と記憶を持ち続ける
 - ⑦初心者への配慮を欠かさない
 - ⑧他者へのリスペクトと適度な距離を保つ、ということです。
- こんな配慮をしながら「風通しのいい市民活動」を続けていきたいと思っています。

(記・細田伸昭 会員)



市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信(ミニコミ)を、発行者の方に紹介していただきます。

めだかクラブは「障がいがある人もない人も一緒に遊ぶ会」として、西東京市田無で活動をしています。

1979年に前身であった「めだか」が発足、81年4月に「めだかクラブ」としてスタートしてから今年で42年が経ちました。会員数は約40世帯、50名。

毎月20〜30名が集まり、ボツチャやモルツクなどの室内レク、折り紙や紙飛行機作りなどの工作、年に2回のハイキングなどの活動をしています。

障がいの有無に関わらず、
みんなで楽しく遊ぶ時間を持

「したい。そしてそこから繋がった仲間たち、この地域に暮らす障がいがある人たちと一緒に生きていきたい。会の発足時からずっと変わらず、「共に生きる」がめだかクラブのテーマです。

毎月発行している『めだかだより』では、1面に今月の活動予定、2～3面に先月の活動報告、4面にはめだかクラブに来てくれている仲間たちの紹介や誕生月のメンバーの紹介を掲載しています。結婚や転勤で地方へ移住したメンバーや、仕事の都合でなかなか参加できないメンバーにもどんな活動をしたらかわかるように、広報担当3人で紙面づくりをしています。コロナ前は、月に1回公民館に集まって紙面編集・印刷発送作業をしていましたが、現在は各個人で担当を決め、オンライン上でやり取りをし、最後は事務局で印刷・発送作業をしています。印刷まで

[illegible]

- ・1979年創刊、月刊、50部、A4判、4頁。
- ・年会費：2,000 円(1 世帯)
- ・mail：medaclub1979@gmail.com
- ・当館所蔵：316 号～ 531 号

▽531号内容：5月催し案内（久しぶりのハイキング！電車に乗って出かけよう）、4月活動「お部屋でお花見気分」報告、メンバーの紹介他。

2001年10月にNPO団体として発足し、まもなく22年になるうとしている。

大正、昭和と女性解放運動を続けてきた評論家・社会運動家の望月百合子さんが提唱し、女性史・文学研究者、編集者、教育関係者が中心となつてスタートした。「戦争のない平和な社会」「誰もが自由に集える場の創造」を目指してシンポ

の過程は変わりましたが、『めだかだより』の濃い中身は、今も昔も変わらず健在。特に2く3面はスタツフの持ち回りで原稿を書いているので、個性溢れる文章になっています。

現在めだかクラブでは、一緒に活動をしてくれるスタッフを募集しています。Facebookに活動時の様子をアップしていますので、ぜひご覧ください (Facebook 検索 ↓ @medakclub1979)。「めだかだより」も毎月 Facebook に掲載しています。

誰かのために何かをするのではなく、共に楽しむことを考えてみませんか？ めだかクラブの活動に参加したい方は事務局までご連絡ください。

（久保瑞紀）

[illegible]

ジウムや講座の開催、会報、ブックレットの発行などの活動をしている。

会報は年3回発行で、この5月に64号を発行した。講座の報告、会員の寄稿をメインに、特集や新刊書、映画の紹介など、バラエティに富んだ紙面を心掛けている。

会員には地方在住者もとより、海外からの寄稿もある。号を重ねるごとに寄稿も多くなり、最近では20頁では収まらず、24頁になることが多くなってきた。64号も24頁だ。

そんな会報も創刊号はたったの見開き4頁だった。それが第3号では8頁になり、5号からは12頁に……。会報を並べると、私たちの活動の歩みが一目で見えてくる。どの号も様々な思い出が蘇ってくる。

そうした中で、11年3月11日の大震災・原発事故については3年続けて「脱原発」をテーマにシンポジウムを開催し、報告を会報に載せた。鎌田慧さ

んや澤地久枝さんらパネリストによる原発、放射能への警鐘は、私たち自身の問題であることを再認識させられた。また、現地報告や南相馬の荒涼とした海岸の写真は今も目に焼き付いて離れない。

頁数が多くなるにつれ、印刷費や送料の値上がりは頭痛のタネ。さらに土日の配達中止は編集日程にも響く。デジタル化へと進むのは世の必然かも知れないが、アナログ世代の会員が多い我がNPOのこと、そう簡単にデジタル化は難しい。第一、紙媒体にはデジタルには代えられない魅力がある。悩みながらも、やはり今後とも紙媒体にこだわりたい。

昨年の2月には、第4回「む
 のたけじ地域・民衆ジャーナ
 リズム賞」優秀賞をいただいた。
 その喜びをバネに70号ま
 で、いや75号まで、などとメン
 バーと励まし合っている。

(岡田孝子)

多摩地域公共図書館のミニコミ 収集状況と市民アーカイブ多摩 の新目録を考える

本企画は、2022年2月6日に開催した「目録」と「検索」を考える」に続く、新目録作成に向けての集会である。

最初に企画部会の堀内寛雄から問題提起として、主に多摩地域各図書館での本紙『アーカイブ通信』の所蔵状況が報告された。国立国会図書館オンライン・都立図書館OPAC・区市町村立図書館新聞雑誌総合目録・東京都立図書館統合検索・カールローカル(東京に絞る)を調べたが、多摩地域の全中央図書館に毎号送付しているが、オンライン検索での所蔵を確認できる



機関はわずかしかなことが判明した。所蔵対象となっていないかったり、データ採録されていない「簡易」資料の扱いとなっていない可能性があり、多くの市民活動資料(ミニコミ)も同じような扱いになっているのでは、という提起があった。

次に、会員・運営委員7人から、多摩地域図書館等12施設におけるミニコミ収集状況(資料の位置づけ、保管状況、アーカイブ多摩の所蔵資料、配架場所、分類、検索の有無)が報告された。図書館におけるミニコミの位置づけは、「郷土資料」「地域資料」が多く、「雑誌扱い」や「市民団体、個人などが発行する通信」と積極的に位置づけているところもあった。

保管状況はまちまちであり、調布市立中央図書館の約500タイトル(同図書館の「地域資料パンフレットリスト」や報告者が1点ずつリスト化した小金井市中央図書館、国立市公民館などは所蔵タイトル数が多いが、公共施設発行の広報誌しか所蔵していない図書館もあった。市民アーカイブ多摩所蔵の資料についても自治体によってかなりばらつきがあり、タイトルとし

てはあっても各号入力はされておらず、欠号も多い。

配架場所・分類は、「地域資料コーナー」に置かれる場合が多く、五十音順などで並べられている場合が多い。検索できる図書館は少なく、リストがあっても公開はされておらず、職員の記憶に頼るか、書架を見て回るしかない。また、市民活動センターなどでは、ミニコミ・チラシが適宜ラックに配置されているものの、積極的な収集はされておらず、市民向けの保存は行われていないようである。

続いて市民アーカイブ多摩の現在の資料データベースの現状や検索方法、並び替えが出来る項目などを共有した。それらを受けて後半では、新しい目録のイメージを語り合った。参加者からは、「多摩地域全体での市民活動資料の収集状況をきちんと調査する必要がある」「どのように残していくのか」が問われるのではないかと「ミニコミや郷土資料は製本しないと捨てられる」「地域ごとに、所蔵を含めた目録が欲しい」といった意見が出された。

また、図書館等が指定管理者運営をされる中では、ともすれば「人を減らせ」との掛け声が大きくなり、地域との関係性が薄れ、職員にも余力がなくなっていく現状がある。それに対し「図書館の役割を問い直し、博物

夏 ブルーベリー

緑地にはグリーンサンクチュアリ悠の皆さんが丹精込めて育てているブルーベリーの木が20本程あります。昨年は大豊作でおすそ分けをいただきました。プチッと口に入れると甘酸っぱさが広がり、疲れが吹っ飛びました。

果物、ジャム、ケーキなどでお馴染みのブルーベリーは、北アメリカで野生種から改良された落葉小果樹で、広く栽培されています。ツツジ科には、5枚の花弁がくっついて筒を作る合弁という花型を基本として、花筒の先がじょうごのように広がるもの(ツツジ、シャクナゲなど)と先が狭く



なつてつば状になるもの(ドウダンツツジやアセビなど)があります。また、果実が乾いて裂けるものと、多汁質で液果(ベリー)になるものがあります。ブルーベリーの仲間であるコケモモ属は壺状の花と液果を持つことが共通の特徴で、日本にはよく似たクロマメノキがあり、中部地方以北の高山や湿地で見られます。

(邑田仁「元東大小石川植物園園長・NHK『らんまん』植物監修チーム」)

ているミニコミ類の新たな目録作成にあたって、新しい視点を得た集会となった。

(中村修「運営委員」)

緑蔭トーク第4回

9月23日(土)午後4時15分

市民が学び、考える歴史講座

「町田自由民権カレッジの実践

松崎稔さん(町田市立自由民権資料館

会場・市民アーカイブ多摩(8頁)参加費300円/定員20人(要申込)

歩くの大好き、お遍路さん



山口真理子
資料整理スタッフ

私は運動神経が鈍く、小さい時から何をやってもダメで、その具体例を連ねただけでこの原稿を埋める自信があります。しかし、歩くのだけは運動神経とはあまり関係がない、というわけで、

学生時代には山手線一周(約40kmを一晚で)、社会人になってからは秩父34か所を歩いたりしました。そして、退職したら四国八十八か所を歩く、というのが目標になりました。

退職後を目標にしたのは、一気に全て約1200kmを歩く「通し打ち」を想定していたからです。が、退職後もいろいろ忙しく、結局10回に分けて8年かかっただけの「区切り打ち」となりました。「区切り打ち」は、前回行った場所から歩き始めるので、往復の時間がかかり、実際に歩ける日数はどうしても少なくなります。39・40番を巡った時などは7日かかっているんですよ。

第1回目は2009年11月13日(18日)の6日間。実はこの年は「足底筋膜炎」という足のトラブルに見舞われ、1kmを歩くのに20分以上かかるという最悪の状態でしたが、母がこの年の元日に亡くなったので、何としてもこの年から始めたかったのです。

乗り物を最大限利用し、高知の知人の車を頼り、山道は外す、という情けない初回でした。結願の寺88番札所・大窪寺にたどり着き、1番札所・霊仙寺に戻って「四国八十八ヶ所霊場満願之証」なるものをもらったのが16年11月9日。翌17年7月24日高野山奥の院にお礼参りに行き、完結しました。

すっかり歩きだしたのは10年第2回からです。1日大体30km前後歩きましたが、後半は27・28kmが限界のようになりました。当時は携帯電話の時代ですが、第3回11年からはその小さな画面でせつせと友達へお遍路だよりを書き、それが記録となりました。久しぶりに読み返し、実にいろいろあったことを思い出しました。「巡礼道はあくまでも信仰の道、観光ルートではありません」とガイドブックにはありますが、歩くのがただ楽しかったで

す。でも、本堂と太子堂では、ちゃんと般若心経を唱えましたよ。最初はボソボソでしたが、後では大声で。

四国八十八か所巡りの面白さは、山道もあれば県庁所在地のような都市もあることでしょうか。次の札所まで2日半かかった時であれば、1日に6カ所巡ることができた時もありました。歩いていて困るのはトイレと昼食でした。「トイレを見つけたら出し惜しみるな」というのは私が作った格言です。コンビニ

二や自販機等はほとんどありません。一方、どんな小さな集落にもあるのは郵便局でした。私のもう一つの趣味は郵便貯金です。これは嬉しかった。目立たない店を教えてもらって昼食にありついたり、コーヒーをご馳走になったり、そこで出会った人との会話が弾んだり、郵便局でのエピソードだけでもたくさんあります。

毎日、毎回いろいろなあり過ぎて、本当にこれがたった1日、1回での出来事だったんだろうか、と不思議に思われるような1200kmの旅でした。とても書き尽くせません(が、何字になってもいいから書けと言われたら困る……)。(やまぐち・まりこ)主に土曜開館日に資料整理・調査担当

ネットワーク・市民アーカイブ2023定期総会報告

長期計画・資料目録・多様な参加

6月4日(日) 11時から、2023年度定期総会を開催しました。正会員11人(委任状参加29人)と賛助会員1人の参加がありました。

22年度の活動実績として、例年通り開館継続し、147人の来館者、65の新規ミニコミの収集開始、岸中書庫の整備をすすめたこと。緑陰トーク、宿泊

を伴う福島の資料館見学や法政大学環境アーカイブズで70年代のミニコミ閲覧、多摩地域図書館の調査などを行ったこと。パンフレットの改訂や通信の発行、長期計画を考える準備として運営委員各自の思い

をヒアリングしたことなどの報告がありました。



現場を訪ねる⑨ 国立国会図書館の利用スペースとバックヤードを訪ねる

7月25日(火) 9時50分集合

・集合場所…国立国会図書館南口
・定員15人(会員限定・要申込)

23年度は、開館業務や催し・通信発行に加え、①「市民アーカイブ多摩」の次の10年を見えながら長期計画の立案に着手する、②多摩地域全体での市民活動資料の収集・提供状況も把握しながら、新たな目録の作成を進める、③会運営や開館業務等に関わる多様な参加の形を模索していくことが提案され、承認されました。

運営委員会の他に、広報部会・企画部会や長期計画・目録作成に向けてのプロジェクトも動き始める予定で、会員であればどなたも参加歓迎です。市民アーカイブ多摩の資料整理や資料収集ボランティアなども募集しています。今年度もよろしくお願いたします。

(江頭晃子)運営委員・事務局

アーカイブ多摩 目録

◆果樹がいっぱい

市民アーカイブ多摩はNPO法人グリーンサンクチュアリ悠さんが大切に保全活動をしている緑地内にあるため、開館日には森林浴も楽しめます。樹林地の中に、アンズ、モモ、夏みかん、柿、ビワ、ブルーベリーなどの果樹もあり、初夏にはたくさんの実がなっています。今年はアンズが豊作！とのことでおすそ分けをいただきました。すっぱおいしい！

◆2022年度実績データ

総会で報告のあった22年度事業のうち、データを一部ご紹介します。①開館日72日。②来館者数195人。③データ入力数5672点。④新ファイル作成数65タイトル。⑤ファイル総数2068タイトル。

22年度は来館者もボランティア数も多く、開館日は賑やかな日が続きました。

◆目録作りを一緒に！

今年度はいよいよ新しい目録づくりを具体的に形にしていくなために動き出します。ミニコミ群の所蔵を明らかにすることで、市民の活動全体が見えてきます。目録作りプロジェクトに参加してくださる方、ご連絡ください。

◆資料整理・収集 ボランティア募集中

図書館などではなかなか出会えないミニコミには、マスコミでは報道されない、はつとせられる視点がいっぱい。資料整理をご一緒にくださる方、お待ちしております。

◆夏季休館

8月12日(土)、16日(水)、は休館日となります。

運営委員会など

- 2月4日 「目録」と「検索」を考える
- 2月開催。参加者23人。
- 2月17日 第11回運営委員会、参加者5人。会員・カンパ者、当番予定、来館者・各部会から報告(以下毎回)。集会感想・反省、23年度の各部会・プロジェクト課題確認、総会議案役割分担他。
- 3月17日 第12回運営委員会、参加者4人。22年度活動概要読み合わせ確認。助成金申請、国会図書館見学会、資料寄贈依頼対応検討。
- 4月21日 第1回運営委員会、参加者4人。23年度活動方針の柱最終確認、22年度決算報告、23年度予算検討、緑陰トーク役割分担、運営委員会日程検討。
- 4月22日 第1回緑陰トーク開催(話し手・細田伸昭)。参加者22人。
- 5月19日 第2回運営委員会、参加者4人。23年度運営委員・当番・ボランティア体制確認、総会&講演会役割分担、法政大学連携、アーカイブ通信28・29号検討、緑陰トーク分担他。
- 5月27日 第2回緑陰トーク開催(話し手・六鹿篤美)。参加者18人。



会員数(2023年5月)

171(正会員64人 賛助会員102人・5団体) ◆新規入会ありがとうございました (正会員)

角尾宣信さん 後藤真弓さん (賛助会員)

未来の福島こども基金

枝松 栄さん 城戸節子さん

篠原史生さん 立石昌紀さん

松本理枝子さん 匿名1人

カンパありがとう (2023年2~5月)

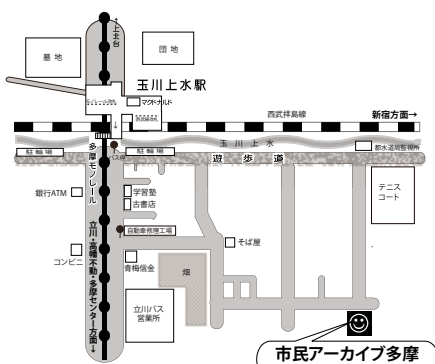
新井勝紘さん 草川幸子さん
駒田和幸さん 鈴木美和子さん
住田啓子さん 高安イツ子さん
富窪高志さん 中村光一さん
麓 常夫さん 堀内寛雄さん
松井隆志さん 森井雅人さん
山口源治郎さん 横田順子さん
吉田美子さん 渡辺 樹さん
匿名3人

会員の声

・総会議案の「活動報告」にあるさまざまな活動は、それ自体がアーカイブされるものです。今年の「活動計画(案)」は少数(失礼)のメンバーでよくもこれだけの活動をするのか！と敬服します。
・総会議案書の活動の様子を伺い、励まされます。
・開館から10年目に「次の10年を見すえた長期計画に取り組んでいきたい」という方針は大賛成です。
・通信でいろいろな方々のお話を楽しく読ませていただきます。

編集後記

改めて原発事故に思いを馳せている。原子力災害検証館が人びとの声を伝えようと模索する姿は、当会としても学ばべきものがたくさんある。(佐・江・鈴・増)



【市民アーカイブ多摩利用案内】

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(年末年始・8月中旬休館有)
- ・開館時間：午後1時～4時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：東京都立川市幸町5-9-6-7 (多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分)
- ・tel・fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：市民団体や個人が発行するミニコミ(通信や会報等)
- ◆会員・カンパ募集中 ～市民の活動を過去・現在・未来につないでください～
- ・正会員1口6,000円/年 ・賛助会員1口3,000円/年 ※団体会員2口～
- ゆうちょ銀行 振替口座00120-9-729226 口座名：市民アーカイブ
- ※他銀行から ○一丸(ゼロイチキュー)店(019)当座 0729226